

世帯と人口
(平成7年1月1日)
世帯 39,459 (+55)
人口 112,705人 (+121)
男58,236人 女54,469人

広報えひな

編集・発行
海老名市役所秘書広報課
〒243-04
神奈川県海老名市勝瀬175
☎ (0462) 31-2111

この広報は再生紙を使用しています。



▼「鬼は外、福は内！」と元気な声が…
(市立下今泉保育園で)

春の足音 もうそこそこに

屋内にこもりがちなこの季節、外では、「福は内、鬼は外」と、寒さを吹き飛ばすような子どもたちの元気な声が、響きわたっています。二月三日は節分の季節の変わり目です。とはいうものの、まだまだ寒い日が続きます。でも、子どもたちの元気な声に、植物や動物たちも早く目を覚ますのです…。

もうそこまで、春の足音が近づいているかもしませんね。

▲無事、鬼退治ができました

“節分”は季節の変わり目

立春の前日で、冬から春への季節の変わり目をさしています。もともとは、立夏、立秋、立冬の前日も節分といいましたが、次第に立春だけが大事にされるようになりました。邪氣を生じ災禍をもたらすことから、これを払う行事として豆まきなどが行われました。

室町時代の中期から、今日のように立春の前日を節分として、桜の小枝に蠅の頭をさしたの戸口にはさみ豆をまいて、豆を払うようになりました。これが一般家庭に入つたのは、江戸時代になってからで、「福は内、鬼は外」と唱えるようになつたのもその頃です。なぜ、豆をまいたのかは、諸説ありますが、宇多天皇(第59代)の御代(88~89)に鞍馬山の鬼が都に出てきたので困っていました。その時、毘沙門様のお

告げがあつて、七人の博士が七百四十九日の間祈禱をして、鬼の出てくる穴を封じて、三石三斗の豆を投げつけて追い払つたという伝説から来ているといわれています。

市内でも、節分の日に、煎つた豆を升牌に入れて、神棚に供えてから「福は内、鬼は外」と大声で唱えながら、神棚・仏壇・屋外の小祠・鎮守様などへまきに行きます。また豆は自分の年の数だけ拾つて食べ、その後牌に残つてある豆と茶の葉を土瓶に入れて湯をそいで飲みます。これをラクチヤ又はラクチャ(福茶)といいます。また豆を少し残しておいて、その年に初めて雷が鳴つた時にまた豆を少しだけ残しておいて、本郷のある家では、豆を焼いて、その年の天候を占つていました。



「おうちでも豆まきするよ！鬼の役はお父さん」「鬼は角があつて、きばが出ていて目が大きいんだよ。あと、太い棒みたいの持っているんだ」と今泉保育園の園児たち。

かぶっているお面は、園児たちが3日間かけて作ったもの。折り紙や空箱を利用したお面など、ユニークなものばかりでした。

